

野村 幸正 著

『かかわりのコスモロジー
— 認知と臨床のあいだ — 』

関西大学出版部（1994. 3. 15）2,000円

書評は難しい。特に仲間うちではなおさらである。評者は人間関係に縛られて辛辣な批評をひかえ、あたりさわりのない御託を並べることがもある。時には、評者に相当の苦痛を強いることにもなる。本来ならば、今回も仲間うちの誰かにその苦痛を押しつけることになるのだが、あえてそれを避け、自ら御託を並べることにする。とはいっても、自らの著書を自らの手で「書評」することはできない。内容の紹介という手もあるが、いまさらそれも煩わしい。

そもそも昨今、本は腐るほどある。紀伊国屋書店の本棚の前では、このなかに自らの一冊を加えることにどれほどの意味があるのか、正直いって疑わしい気分さえなる。にもかかわらず一冊の著書を世に出すのにはそれなりの理由がある。もちろんその理由は著者によってさまざまであろうが、小生の場合は、名も顔も知らない読者とある世界を共有したいがためである。たとえそれが小さな世界であっても、それが確実に拡がってゆくことを信じて今後も書き続けるだけである。少し大袈裟な言い方をすれば、それが学者としての私の証である。

さて本来の「書評」であるが、ここではずぼらを決め込み、すでに掲載された新刊紹介を勝手に「書評」とすることでお許し願いたい。

一つは東京大学新聞（平成6年4月26日）での新刊紹介である。評者が誰か私は知らないが、出版部からコピーが著者宛てに送付されてきた

ので掲載する。ここで評者に深く感謝しておきたい。

“新学期が始まり、これまでとはかなり違った環境で生活するようになった人は多いだろう。そんな中で、対人関係や自分の将来に思いを馳せる機会がでてくるかもしれない。自他に関わらず「人」について考えようとする時、基準となるのは、やはり自分自身である。自分についてどこまで深く掘り下げているかが、他人を読み解く鍵にもなる。

本書は、認知心理学を専攻する著者が、インド滞在の経験を活かしつつ独自の哲学・世界観を説く。フロイトから西田幾多郎、中村雄二郎まで内外の学者が縦横に論じられている。最先端でありながら入門書としても格好である。
〔田〕”

他の一つは関西大学通信（平成6年7月4日）の新刊紹介である。評者は私の友人である社会学部の雨宮俊彦氏である。氏は優秀な、視野の広い心理学者である。もっとも評者は小生との人間関係に縛られて辛辣な批評をひかえたことだろう。彼に苦痛を強いたことに謝罪するとともに、この場をかりて感謝の意を表したい。

“現在、認知科学は、多様でゆたかな混乱の状態にある。逐次の記号処理モデルを基礎に統一的なこころの科学が可能だとする正統は、ニューロ、ギブソニアン、状況論など、周辺からの攻撃で、ずたずたにされたが、新しい正統

はまだあらわれてはいない。

著者は、はやくに正統的な記憶研究で一家をなしたあと、こころの科学の新しいパラダイムをもとめて模索をつづけてきた。わざ、伝授、未知の構想、身体、道具、自己、風土、インドなど探究の対象は多岐にわたる。わざや伝授のように、具体的な研究としてすでにおおきな影響をあたえているものもあれば、基本的なアイデアの展開をはかっている段階のものもある。一貫しているのは、かかわりのなかで包括的にこころを捉えようとする方向性であり、本書はそれが臨床の知という観点から、わかりやすくまとめられている。

海外の権威をなぞることが、まともとみなされている日本の人文社会系では、独自の探究は疑わしくみられる。しかし、オリジナルな貢献は、独自の探究と時代の問題状況が会ったところにしか生まれない。評者は、著者の探究の中間的総括というべき本書を読んで、状況論あたりで、そうした幸福な出会いが生ずるかもしれないという印象をもった。(雨宮俊彦)

この他、『真宗』(第1083号 平成6年6月10日)にも紹介されたときく。最後になるが、本書への著者の思いを次の短文に託したい。

謹呈

生きるもの・生きること、この分かちがたい世界を自らの身体のなかに統合し、生の実感を味わいたいものです。昨年の夏、インドのラジャスタンを一月余り彷徨しましたが、そのさいしばらく滞在したタール砂漠の村人の生活は実にもの静かであり、対決と調和のなかに一つのコスモスを見出しているように思われました。

平成6年 春 著者

これは本書を謹呈したさいに書き添えたものである。当時の、そして現在の私の偽らざる心境である。なお、今回の変則的な「書評」を契機にいく人かの読者とある世界を共有できるとすれば、著者としてはこのうえない喜びとなろう。(野村幸正)

書評 D・エラスムス著

中城進訳『エラスムス教育論』

二瓶社刊 (1994. 12. 10) 2,800円

7年ほど前からラテン語に取り組んでいた中城進さんが、エラスムスの翻訳書を出版された。これまで、本誌を中心にして訳稿を發表されていたのをまとめ、さらに詳細な訳注と解説を加えられている。私はルネッサンス期の教育思想についてはまったくの門外漢で、書評の任には

ふさわしくないのだが、この翻訳書について、簡単なコメントをさせていただく。

本書は、エラスムスが著した三つの論文、『子供たちに良習と文字とを惜しみなく教えることを出生から直ちに行なう、ということについての主張』(1529)、『子供の礼儀作法につ